

平成 27 年度前期 大学院授業評価に対する教員からのコメント

平成 27 年 12 月 3 日
研究科委員会

平成 27 年度後期終了時に実施した「大学院生による授業評価」の回収率は 72.7%でした。ご協力くださった皆様、ありがとうございます。大学院生から寄せられた意見の要約と、それに対する教員の回答を枠内に示しています。今後も、大学院生と教員双方の努力によって学習・教育の質向上を図りたいと考えます。

1. 大学大学院生自身の取り組みに関する事項

1 年生と思われる意見の中には、大学院での学習活動についての予測が不十分だったこと、入学後しばらくは目の前の課題に追われて予習が間に合わなかったこと、仕事と学業との両立が辛かったこと、時間の使い方に工夫を要したことなどの反省が述べられていた。その一方で、自分の考えを整理して他の大学院生に伝えることの楽しさを感じたこと、他の大学院生との意見交換を通して自分自身の考えが変化しつつあること、後期に向けて主体的な学びにつなげたいことなど、建設的かつ具体的な考察もなされていた。2 年生と思われる意見の中には、積極的に取り組めたという意見、探究には自分自身をもっと律することが必要という意見、研究指導を受ける過程で抱いた葛藤なども記載されていた。全体的に、大学院での学習活動を進めていくうえで困難感を抱いたという意見とともに、精一杯努力したことや自分なりの学習ペースを掴んで学びの楽しさを実感したなど自己成長を肯定する意見が述べられていた。

多くの 1 年生が経験する大学院での学習活動を経験して感じた戸惑いは、大学院生が成長するために必要な一過程であり、誰もが通る道ともいえる。現に、自分自身の努力によって克服しつつある大学院生もいるが、先輩や教員の経験談を参考にしながら乗り越えて頂きたい。2 年生においては、大学院での学習活動に主体性と自律性が求められることをすでに体感していると思われるが、集大成である修士論文完成に向けて一層の努力を期待したい。多くの大学院生が言及していた時間的制約から生じる学びの不全感については、「学びに際限はないが時間には限りがある」という現実のなかで、自分自身がどの程度学びの質を追究できているかという視点で工夫を続けて頂ければと思う。

2. 授業内容・方法に関する事項

プレゼンテーション中心の授業方法については、大学院生主体で行う取り組みとして良いという意見がある一方、発表内容や意見交換内容によっては（大学院生側の課題もあると断った上で）深化させたり発展させたりすることが難しいため、教員から視野を広げるための助言を増やして欲しいという記述があった。その反面、意見交換場面で教員の発言が先行して大学院生が活発に発言できる雰囲気ではなかったとの指摘もあった。またプレゼンテーションを含む大学院での学び方についての説明がもっと欲しいと希望する記述もあった。他領域の教員から指導を受けることが出来るシステムは良いが思うように活用できない現状であること、もっと活用するためにも各教員に開放的な雰囲気があればと期待を寄せる声もあった。今回のアンケートにおいては、複数科目に対する意見が少数ずつ寄せられた。

大学院では、学ぶ姿勢として自主性と積極性が重んじられる。大学院生各自が認識している部分であると思う。大学院は、教員と大学院生が共に「看護学」を深めるという立場で、協同して授業を作り上げていく側面が大きい。意見交換の場においても、大学院生自らが教員を上手く活用できるよう工夫をして学びを深めて頂きたい。

具体的な科目に寄せられた意見や要望は、真摯に受け止め、今後に向けて対応を行っていききたい。授業改善には大学院生と教員双方の努力が不可欠となるため、今後も積極的な働きかけをして頂きたい。以下に、科目担当教員からのコメント概要を示す。

◇生涯発達特論 I

大学院生のプレゼンテーション後には、必ず大学院生からの意見を促した上で、待っても意見が出ない時に教員が発言することの方が多かったと思う。基本的には大学院生同士の意見交換が成立すれば教員の発言は不要であるが、大学院生のみでは議論が深まらないと思われた時や視点が固まってしまった時にはコメントをするよう意図的に関わったつもりであった。教員の発言がないと、議論が深まらず発展しない場合もあり得ると考えている。

◇研究方法 I

本授業は、学部段階で学ぶ知識・方法を復習し、修士段階で必要となるアドバンスな知識・方法を習得してもらう計画だった。第1・2回は学部段階の内容だったが、結果的に講義スピードが速すぎたようである。ただこの部分は修士論文作成のために必要不可欠な内容で割愛できない。次年度は事前に資料を配布し、学部段階の内容は予習で対応してもらい、授業では修士段階の内容により時間を割きたい。また各領域演習でクリティークした論文を毎回提出してもらい、講義内容に合わせた研究方法としての検討をしていきたい。

◇保健・看護総合特論 I

25、26年度入学生に対しては、入学前に使用書籍を読んでおくよう通知していたが、現状として授業開始時にはあまり読めていなかった。その理由は、書籍の取り寄せに時間を要したこと、入学前準備が忙しかったことなどがある。そのため27年度は入学後早期に渡す手配をし、最初は読む章を絞るなど学習には配慮した。大学院生の立場に配慮していなかった訳ではない。今回「事前に図書を示して欲しかった」という要望をうけ、今後は入学前に通知したい。

◇分娩期のアセスメントとケア、助産基礎実習、専門実習

課題に対するフィードバックを授業内容の主としたのは、課題から問いを導き出すプロセスを学んでほしいという意図があったからである。授業中に提示された質問に対する答えがフィードバックされない場合が多いとのことであるが、質問はあくまでも授業内容の理解度の確認であり、復習により確認が可能な内容である。しかしながら、上記のことについての意図が伝わるように、今後は授業方法の目的や意図を具体的に明確に示すようにしたい。分娩助産技術に必要な知識は、時期別にポイントを押さえて教授している。技術試験は一連の流れで実施しているが、評価時には個別にポイントを指導している。専門実習の反省会日程が急に病院の事情で変更され、大学院生への連絡が十分に行き届かなかった。今後は緊急時でも連絡が取れる体制を整えていく予定である。助産実習前の事前準備に関するオリエンテーションについては、大学院生の理解が進むよう段階的に進めたい。

3. 授業展開とシラバス内容の整合性に関する事項

この項目についての記述は少なかった。「大体沿っていた」という意見が主だったが、「シラバスとは違う内容で授業が行われることがあり目標は何かと疑問に思うことがあった」という意見もあった。また、「その回の授業で何を目標としているのかについて教えて欲しい」という要望もあった。

シラバス内容に変更が生じた場合、教員にはきちんと説明をする責任がある。その説明責任については徹底できるように努めていきたい。仮に十分な説明がなされずに疑問が生じた場合には遠慮なく「説明を求める」投げかけをして頂きたい。この項目は授業評価において要となる部分でもあり、後期授業評価においては多くの意見が頂ければと思う。

4. 学習環境に関する事項

大学院生用研究室の備品、その補充に関わる事務対応、警備員への要望などが寄せられた。

今まで、当該項目に対するフィードバックも紙面にて行っていたが、今後は学習環境に特化し「大学院生との意見交換会」を開催していくことを計画する。今年度に関しては後期開催とするが、次年度以降は、7月の後期ガイダンス前後に継続開催を予定している。

5. 総合的な評価に関する事項

自分自身の課題に向き合いながら学問探究はできているという肯定的な意見が多かった。具体的には、時間的制約の中で発展的学習は不十分だったとしながら、大学院での学び方がわかってきたこと、知見を広げることの楽しさを感じることができたこと、個々の授業が最終的に自己の研究課題に繋がっていく構成になっていると自覚できたこと、などが記述されていた。また、社会人として学ぶための環境づくりに対する感謝、研究指導や実習指導に対する感謝も記されていた。一方、あまり学問を探究できなかった、後期が不安などの意見も一部にあった。研究倫理審査申請書類が記入しづらいという理由から書式改善を求める記述もあった。

大学院での学習活動を進める過程で、試行錯誤しながら視野の広がりや深まりを実感している大学院生が多かった。この気持ちを大切に今後の学習や研究活動に取り組んで頂きたい。

大学院生が研究を進める上でより良い研究計画立案ができることは一義的な課題である。今年度から、研究計画書審査においては、必要に応じて指導教員が同席し、説明および質疑に対応できる体制も取り入れている。研究科としては、大学院生が研究者として自立していくための支援についての検討を真摯に続けていきたい。研究倫理審査申請用紙については研究倫理審査委員会で見直す方針である。また、研究倫理審査においては、必要時大学院生が質疑に対応できる機会を準備しているが、そのシステムを活性化できるよう努めていきたい。

助産師課程の1年生には後期に実習科目が控えている。特に10例の分娩介助を伴う実習は、学部の看護実習だけを体験している大学院生にとっては、学習上の課題を痛感させられる機会となる。実習と研究活動の両立のためには限られた時間をもっと有効に使う必要性が生じてくるため、これまで以上に根気を持って計画的に取り組んでほしい。先輩の経験や助言に耳を傾け、有意義な学びが出来るように創意工夫をして頂きたい。